

たねまきアキラ

木屋

①KCUAとその周辺に広がる
創造活動の現在形

05

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

ZINE

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAとは

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAは、2010年春、中京区堀川御池に京都堀川音楽高等学校の新築移転に伴い、その敷地内南側に建てられたギャラリー棟（堀川御池ギャラリー）内に設立された京都市立芸術大学のサテライトギャラリーです。

「@KCUA」は大学の英語表記「Kyoto City University of Arts」の頭文字に場所（サイト）を示す「@」を付けたもので、音読するとラテン語の「アクア=水」となります。生命を養う水のように、芸術が人々の暮らしに浸透し、創造力豊かな社会に貢献するという本学の理念を表現しています。

当ギャラリー学芸員の企画による特別展のほか、京都市立芸術大学の研究成果発表展ならびに教員・在学生・卒業生による企画展など、年間約15本の展覧会を開催しています。そのほか、国内外で活躍するアーティストを講師に迎えた若手アーティスト対象のワークショップや京都市立芸術大学移転整備プロジェクト「still moving」の実施、また2016年より拡張された場におけるアートマネジメント人材育成事業「状況のアーキテクチャー」に参画するなど、展覧会だけでなくとどまらず、多岐にわたる活動を実施しています。

COVER PHOTOS: 田村友一郎

「叫び声／Hell Scream」にまつわるサーチ
明治150年・京都のキセキ・プロジェクト
京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展
田村友一郎「叫び声／Hell Scream」
2018年7月21日（土）-8月19日（日）

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAでは、昨年度より本学芸術資料館収蔵品のさまざまな活用のあり方を探るべく、実験的な企画を実施しています。2018年度は美術家の田村友一郎を協力作家に迎え、本学の前身・京都府画学校の創立者の一人であり、煎茶道の発展に寄与したことで知られる日本画家の田能村直入の足跡を辿りながら、新たな物語を紡ぎ出すことにより収蔵品の「演出」を試みます。

Photos by Yuichiro Tamura (cover, p. 02, back cover)

たねまきアクア

05

Contents

- 4-15 **STUDIO VISIT @KCUA** —— クリスチャン・ヤンコフスキー「ベルリンのスタジオ」
- 16-25 **WORKSHOP @KCUA** —— 「アーティストワークショップ 後日譚」
- 26-27 **SCHEDULE @KCUA 2018.4-2019.3**
- 28-29 **VOICE @KCUA** —— 田中みゆき「見えない人にとってこの冊子は白紙です。」
- 30-31 **REPORT @KCUA** —— 田村友一郎「麗水」

たねまきアクア

たねまきアクアは、@KCUA とその周辺に広がる創造活動の現在形、
クリエイションが立ち上がろうとしているシーンを紹介していく広報誌です。
(不定期発行、無料)

STUDIO VISIT @KCUA

vol. 5

特別
編

Christian Jankowski

スタジオには映像上映用の壁面とプロジェクターが常設されている



クリスチャン・ヤンコフスキー ベルリンのスタジオ

TEXT: Mizuho Fujita

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAでは毎年、国際的に活躍する海外作家の創造と実践に触れる機会として、展覧会や実践的なワークショップ、レクチャーなどを実施しています。2018年度は、挑発的でアイロニカル、かつユーモア溢れる作風で知られるクリスチャン・ヤンコフスキーを招聘し、9月から10月にかけて日本初の個展を開催します。

ヤンコフスキーは2018年6月に京都に1週間滞在し、本学出身の若手作家や学生を対象としたレクチャーパフォーマンスや、新作に向けてのリサーチを行います。これ

まで、さまざまな業種の人々との協働作業を通じて、アートの世界とそれとは異なる世界とを接続し、その関係性やそれぞれのあり方を問いかける活動を行ってきたヤンコフスキーは、京都で何を発見し、今度はどのような方法で現代芸術と社会とを結びつけていくのでしょうか。

このプロジェクトに向けての調査と打ち合わせのため、オークションハウスであるグリーゼパッハ（Grisebach^{*1}）のギャラリーでの個展「Neue Malerei」の会期（2018年3月22日-5月12日）に合わせてベルリンのスタジオを訪ねました。



*1...Grisebach
地下鉄（U-Bahn Berlin）
クアフルステンダム（Kurfürstendamm）駅周辺（高級ブランドショップが連なるエリア）に位置する。
19世紀、20世紀の美術と写真を専門とするオークションハウス。

2018年4月。滞在していたホテルから2台のバスを乗り継ぎ、ベルリン東部のアルト＝トレップトー地区へと向かう。隣接するクロイツベルク地区やノイケルン地区^{*2}とは少し雰囲気異なる、緑が多く静かな住宅街である。

クリスチャン・ヤンコフスキーのスタジオは、通りに面した門から通路の奥に入った建物の2階部分にある。時折鳥のさえずりが聞こえてくるような、落ち着いた環境だ。広いキッチンで彼が紅茶を淹れるのを待ちながら、スタジオの様子を眺める。部屋の中央に置かれた広いテーブルの奥には壁一面に膨大な量の作品資料ファイルが並ぶ。そのほかの壁面も、実は全て収納スペースとなっていて、この中にも資料がぎっしり詰まっている。

「このテーブルは主にコミュニケーションのためにあるようなもので、僕がここで作品を作ることはほとんどない」と彼は言った。世界中のいろいろな場所で、多様な分野のプロフェッショナルたちと仕事をする。それがクリスチャンの制作スタイルだ。「僕の作品について聞きたい？」という問いに、もちろんと答えてその説明に耳を傾ける。スタジオの中にあるいくつかの作品や、ファイリングされた資料や動画を見つつ、作品そのものだけでなく、世界各地で一緒に仕事をしてきたさまざまな人々とのエピソードやその地で見つけた興味深いものなど、Macにストックされたたくさんの写真をスクロールさせながら、次

から次へと話が続いていく。そんなこんなで、嬉しそうにひたすら話し続けていた彼が突然「お腹が空いたから何かを食べに外へ出よう」と提案した頃には、私がスタジオに到着してから2時間が経っていた。

食事をしながら、家族のことや、所属するギャラリーのこと、2017年の夏に開催されたヨコハマトリエンナーレについての話など、またとめどなく続く話の途中で、京都の街と文化や京都市立芸術大学についての質問が挟み込まれる。まだ見ぬ「京都」は彼にとって好奇心を掻き立てるものではあるが、「非常に日本的な場所」という漠然としたイメージを抱くだけにどまっているようだ。

「とりあえずはやく京都に来た方がいい。伝統的なものと現代的なものが混在していて、とにかく不思議なところだから」と私は言った。そう、京都は本当に不思議な街だ。そして私が口で説明なんかするよりも、自分自身の肌で感じた方がずっと良い。これまでクリスチャンが作品を制作しながら、その場所でさまざまなものを観察し、おもしろいものを探し出してきたように。

「そうだね、すぐ行こう」

そしてスタジオに戻り、私たちは京都でのこと、また今後のスケジュールについてじっくりと話し合ったのだった。

*2…クロイツベルク地区
やノイケルン地区
トルコをはじめとする他国
からの移民が集住していた
地区に2000年頃から若い
世代のアーティストやクリ
エーター、ミュージシャン
や学生が集まるようになり、
国際色豊かで活気のある
エリアとなっている。ま
ずクロイツベルク地区から
この現象が起こり、徐々に
南側のノイケルン地区にも
広がっていった。



アルト＝トレップトー地区



スタジオには広めのキッチンスペースも完備



床にあるラグは《Artist's Path》(2010)。訪れた各地で道順を表すドローイングを数年間描きためていたヤンコフスキー。それぞれの道順は、例えば泊まっていたホテルからヴェネチアビエンナーレの事務所までの道や、アーティストである友人のスタジオからメキシコで最も美しいビーチまでの道などである。いずれもアートの現場を起点または到達点としており、また道標には「醜い彫刻 (ugly sculpture)」などが登場する。展覧会、国際展、あるいはレジデンスなどを渡り歩く、ある意味遊牧民のような存在であるアーティストの生活を表すドローイングを組み合わせて一つの地図として手織りのラグに仕立てた作品。



スタジオのメインスペース。奥左手にある彫刻作品は《Monument to the Bourgeois Working Class》(2012)。メキシコの壁画家のダビッド・アルファロ・シケイロス (David Alfaro Siqueiros, 1896-1974) が撮影したドリルビットの資料写真を目にしたヤンコフスキーは、それを持つ女性がマニキュアをし、ジュエリーを身につけていたことに注目する。共産主義者 (スターリン主義者) であるシケイロスの私生活がブルジョワ階級的なものであったという矛盾点を指摘したこの作品は、シケイロスの自宅兼スタジオであった邸宅を展示施設として活用しているシケイロス美術館 (Sala de Arte Público Siqueiros) での個展「Crying for the March of Humanity」(2012) にて発表された。



「Neue Malerei」

スタジオ訪問の前日に拝見した個展「Neue Malerei (新しい絵画)」では、名画と同じ構図でその情景を演じた「Tableau Vivant (活人画)^{*3}」を題材として、世界中で流通する複製画の約6、7割を生産していると言われる中国・深圳市にある大芬油画村の画工に制作を依頼した絵画の数々が展示されていた。クリスチャンの作品は映像、写真、パフォーマンスなどを中心としたインスタレーションとして発表されることが多く、ペインティングのみで構成された展示というのは極めて珍しい。各メディアが「クリスチャン・ヤンコフスキー、「フェイク」でオークションハウスを埋め尽くす」などと報じるなど、ベルリンではかなりセンセーショナルなトピックとなっていたこの個展について、いくつかの質問に答えてもらった。

——「Neue Malerei」プロジェクトはいつから始まったのでしょうか。

CJ 2015年にアムステルダムゴッホ美術館で発表した作品がプロトタイプになります。あるとき私は、ゴッホが遺した多くの自画像を再現しようとした数々の画像をインターネット上で発見しました。そこで、その中から美術館のコレクションである10の自画像を題材とする写真などを選



「Neue Malerei」展示風景

Courtesy of Grisebach & Christian Jankowski

Photos by Roman März

び、中国の画工に、オリジナルと同じサイズで複製画の作成を依頼しました。そしてオリジナルの横にこれらを展示したのです。ゴッホもかつて、巨匠たちの絵画を模倣することでその技術を磨いたという経緯があります。私はこのプロジェクトを「Neue Malerei」あるいは「Chinese Whisper」と呼ぶことにしました。Chinese Whisper（伝言ゲーム）では、変換に次ぐ変換によって面白い結果が生まれます。それからさらに、インターネット上にある「Neue Malerei」の素材を探すことに夢中になっていきました。

——題材となる「Tableau Vivant」を選ぶ基準はありますか？
cJ インターネット上にある「Tableau Vivant」の中には駄作と思われるものもたくさんあります。私は芸術性を重視しています。クラナッハの「アダムとイブ」に倣って、アダムとイブに扮したマルセル・デュシャンとブローニア・パールムッターを撮影したマン・レイの写真作品^{*4}などはその最たるものです。また、子供たちへの教育のために作られた「Tableau Vivant」は、身体で名画を再現する

*3…「Tableau Vivant」
“tableau vivant”はフランス語で「生きている絵画」を意味する言葉。役者を画中の人物のように扮飾配置し、歴史や文学の一場面や名画などを模倣的に表出したもの。西洋では18世紀から19世紀前半にかけて盛んに行われた。照明を用いるなど演劇のような演出を伴うこともある。初期の写真でもこの手法をとった表現が見られる。ヤンコフスキーの「Tableau Vivant」への関心は2010年のシドニー・ビエンナーレのために制作された映像作品「Tableau Vivant TV」に遡る。同ビエンナーレのキュレーターを始めとするスタッフや、彼の作品の制

作チーム、オープニングに訪れた観客などと協働したもので、作品ができるまでの過程上のいくつかの瞬間を表現するかの如く、作家自身を含めた登場人物が全員停止した中、テレビのコメンテーターだけがその場でフリーズしている人々の間を練り歩きながら解説をする様子が収められている。

*4…マン・レイ「フランス・ピカビアのパレエ「休演」の映画スケッチ、アダムとイブに扮するマルセル・デュシャンとブローニア・パールムッター（クラナッハに倣って）」（ゼラチン・シルバー・プリント、1924）



Neue Malerei – van Eyck, 2017.
Photo by Roman März

ことにより、美術史を体感することができます。

—ほとんどの「Neue Malerei」には余白があります。何故でしょうか？

CJ 「Neue Malerei」には、オリジナルのサイズに合わせて作られたキャンバスを使います。また、「Tableau Vivant」の多くは写真によるものですが、写真はさまざまなアスペクト比で撮影されています。オリジナルのキャンバスに一边を合わせると、大抵の場合はもう片方の長さが合わなくなります。それで余白が生じるのです。写真をペインティングにするときにはトリミングは一切行いません。トリミングすれば、その「Tableau Vivant」に敬意を払っていないことになるからです。私はオリジナルと「Tableau Vivant」の両方に敬意を評しています。「Neue Malerei」は写真、パフォーマンス・アート、そして絵画の全てを讃えるものです。絵画がパフォーマンスを生み、写真に記録され、そしてそれが絵画に戻っていく。オリジナルのフォーマットに戻ることが非常に重要です。それは常に回顧する作業でもあり、さらに興味深く想像力に富ん



Neue Malerei – Dix, 2017.
Photo by Roman März

だものになるのです。

——オークションハウスで「Neue Malerei」を展示することを決めたのはご自身ですか？

CJ ある意味そうだとも言えます。今回の個展で展示している作品は本来、ニューヨークでの個展で《Casting Jesus》(2011)と《Tableau Vivant TV》(2010)という二つの映像作品と共に発表する予定でした。しかし、その個展は政治的な理由で実現しませんでした。ドナルド・トランプ氏が選挙に勝利した頃のことです。会場となるはずだったギャラリーが政治的な要素、例えば選挙を彷彿とさせる作品を含む展覧会をすることを望まなかったからです。そして「Neue Malerei」は、私のスタジオで保管することになりました。しばらくして、スタジオに遊びに来た友人がこの「Neue Malerei」を見てとても気に入り、グリーゼバッハのパートナーである美術史家のフローリアン・イリエス氏^{*5}に繋いでくれたのです。オークションハウスで「Neue Malerei」の展覧会をするのはとても良い考えだと思いました。本物のゴッホやレンブラントを扱っているグリーゼ

*5…フローリアン・イリエス (Florian Illies)

1971年生まれ。美術史家、文筆家、編集者などさまざまな顔を持つ。ベルリンのオークションハウス Grisebach のパートナー、19世紀芸術部門の責任者。著書に『1913——20世紀の夏の季節』(2012年初出、日本語翻訳版は山口裕之訳、河出書房新社、2014年)など。



フローリアン・イリエス氏の新著と
「Neue Malerei」のカタログ

バッハと、複製画を制作する中国の画工の両方にとって、これは真の挑戦になります。西洋では複製画に対し、画工たちとは異なる考えを持っていますし、中国においてさえも画工たちはしばしば見下されることがあるようですが、彼らは非常に精密で洗練された知識と技術を持っており、そのことに誇りを抱いています。私はその複製に対する誇りと精神を素晴らしいものだと思っています。そして個展に際して発行されたカタログには、イリエス氏がたくさんのテキストを書いてくれました。イリエス氏は非常に有名な文筆家で、芸術文化に関する多くの著作があり、中でも第一次世界大戦の前年、芸術家を含む著名人たちがこの世界の転換期に何をしていたかを描き出した『1913——20世紀の夏の季節』は、複数の言語での訳書も出版されたベストセラーになっています。彼と仕事できたことは私にとって非常に喜ばしいことでした。

そしてクリスチャンは、10代の頃に友人と作ったという、彼にとっての最初のパフォーマンス作品「Panic Book」を見せてくれた。その中の1ページに、映画スターになりきった友人



Panic Book



とクリスチャンの姿の下に、元ネタとなったスターの写真を貼り付けたものがあった。

さて、このグリーゼパッハでの個展の関連企画として、ギャラリー・ウィークエンド・ベルリン（2018年4月28日-30日）に合わせたトークイベントが開催されていた。残念ながら私は帰国してしまっていて参加が叶わなかったのだが、ちょうどその週明けに電話をする機会があり、様子を尋ねてみたところ、「こんなのアートじゃないって言われたよ。超ウケる!」と笑っていた。果たして京都で彼が何をしてくれるのか、この原稿を書いている時点でまだわからないけれど、本当に楽しみで仕方ない。



京都でのリサーチ＋クリエーションの様子

クリスチャン・ヤンコフスキー 個展（タイトル未定）

会期：2018年9月15日（土）-10月28日（日）

会場：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

オープニングイベントとして、ギャラリートークのほか、過去作からセレクトした映像作品の上映会（9月15日（土）、16日（日）の2日間のみ）も実施予定。

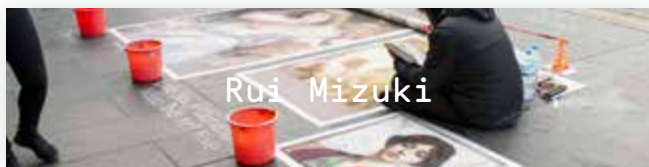
クリスチャン・ヤンコフスキー Christian Jankowski

1968年ゲッティンゲン（ドイツ）生まれ。ベルリン在住。ハンブルク美術大学卒業。映像、写真、パフォーマンスを中心に、芸術に限らずさまざまな分野のスペシャリストと協働し、コンセプチュアルでウィットに富んだ作品を制作することで知られる。毎年ヨーロッパを中心に世界での複数回の個展のほか、国際展をはじめとしたグループ展にも勢力的に参加。また、マニフェスタ11（2016）では芸術監督を務めるなど、キュレーションの分野についてもその手腕を発揮している。ヨコハマトリエンナーレ2017では身体と公共彫刻の関係性について言及する三部作「重量級の歴史」（2013）、「アーティスティック・ジムナスティック」（2014）、「マッサージ・マスターズ」（2017）を出品。シュトゥットガルト芸術アカデミー教授。



Artist Workshops: Epilogue





@KCUAでは、2013年から2015年にかけて「アーティストの招聘による多角的なワークショップなどを通じた新進芸術家育成事業（文化庁委託事業）」として、世界の第一線で表現を切り開いている9組のアーティスト^{*1}を招聘し、彼らをメンターとして、集中的なゼミや対話を中心としたプログラムを実施しました。このプログラムに参加した若手アーティストは延べ52人にもおよび、彼らは本プログラムで得た経験を踏み台にして活動を広げています。今回はその中からそれぞれの方法で海外へ出る足がかりを掴んだ4人の若手アーティストを取り上げ、現在の日々の様子とまなざしを紹介します。

^{*1}

2013年 ウェティット・ヘーマムーン (Uthis Haemamool)、
アピチャッポン・ウィーラセタクン (Apichatpong Weerasethakul)

2014年 川内倫子、エレン・アルトフェスト (Ellen Altfest)、
ラッキードラゴンズ (Lucky Dragons/サラ・ララ (Sarah Rara)、
ルーク・フィッシュベック (Luke Fishbeck))

2015年 ネリー・ソニエ (Nelly Saunier)、パヴェウ・アル
トハメル (Paweł Althamer)、アルトゥル・ジミエ
フスキ (Artur Żmijewski)、グイド・ヴァン・デル
ウェルヴェ (Guido van der Werve)



水
木
星



Rui Mizuki

トーキョーアーツアンドスペース：以下TOKAS（旧トーキョーワンダーサイト）のレジデンスプログラムでオーストラリアのメルボルンに滞在することになり、真夏の日本から赤道を越えて真冬のオーストラリアに到着したのは2017年8月1日のことでした。

僕がメルボルンに興味を持ったのは一冊の本との出会いです。都市計画家／建築家であるヤン・ゲールが『人間の街』（2014）の中でメルボルンを優れた都市空間と人々のアクティビティ、つまり屋外活動によって成り立つ街であると紹介していました。さらに、この街はスケートボードやグラフィティも盛んで、スポーツ都市としても有名であることもわかり、（直感的に）それらの文脈を地政学的な見地から調査研究することで従来のナストリートカルチャーの枠を少し広げることができるのではないかと考えました。そのような動機があり、TOKASのレジデンスプログラ

ムに応募することにしました。

空港から車を走らせること40分、メルボルンの中心街に到着しました。この街は旧市街を中心に現代的なビルや外資系のブランドショップが立ち並び、所謂“現代都市”の典型的な風景を持っています。その点は特段珍しくもなかったのですが、裏通りの多い街の構造には興味深いものがありました。本レジデンスでの僕の主旨は、都市と身体の関係を開始点に都市空間を調査することだったので、この裏通りが多いという特徴は重要な対象になりました。そこで展開される屋外活動を見てみると、この街の人々は裏通りをグラフィティを描く場やストリートバスケットコート、あるいは簡易な折りたたみテーブルを並べてカフェスペースとして活用していることが明らかになりました。本来ならば人の流れがでかさそうな場所も活発な屋外活動によって流動性と親密性が生まれているように感じられ、都市空間の中でのこのような活動が私た

ちの空間知覚に大きな影響を与えているということもわかりました。

レジデンスの中盤頃には、暖かい日差しが時折差し込み、メルボルンが春の訪れを告げていました。この気候の変化とともに人々の屋外活動の内容が変化し、街の活気が商店の立ち並ぶ通りから公園や広場に移り、また別の風景が立ち現れていました。これは、僕自身が屋外活動における人々の行動に注意していたことで生まれた発見で、長期のレジデンス経験、(少々悪意のある言い方かもしれませんが)「やることがそれしかない」という状況がもたらしてくれたものと言えます。普段、一日中ぼーっと街を眺めているという時間の使い方は、(何かの確信がない限り)なかなか勇気のいることになります。しかし、「メルボルンではそれが許された」、僕にとってレジデンスはそれだけでも意義のあることに思えました。そして、街とは地図的な見方をしてもそれを見たとは言いがたく、そこでの

人々の屋外活動も含めた流動的な視覚情報や身体的経験によって現れる総合的風景であることを改めて感じました。

(どこかのラッパーが言いそうなセリフですが)「ストリートがリアル」とは、言い得て妙だなと思ったりします。ただし、僕が作品の中で扱うストリートカルチャーは、字面のままの「通りの文化」と翻訳されて、リアルになるものです。今回のレジデンスは、それを確認しつつ、人々の屋外活動の中にあるクリエイティビティを見つめ直す機会になったと言えます。



水木 皇 Rui Mizuki

1983年京都府生まれ、同在住。京都市立芸術大学美術学部漆工科卒業、同大学院美術研究科メディアアート領域博士号取得。写真、立体、ドローイング、映像などを用いて、都市環境と人間の慣習的な関係をサブカルチャーの美学的観点から解体／再編し美術や社会制度の枠組みを問う。近年の展示に「行為の編纂」(TOKAS 本郷、東京、2018)、「C's」(RMIT PROJECT SPACE、メルボルン、2017)、「鏡と穴－彫刻と写真の界面 vol.3 水木皇」(gallery α M、東京、2017)、「NEO-EDEN」(蘇州金鶏湖美術館、蘇州、2016)など。

NEWS

- ・ 京都の新しいスペース“haku”にて個展を開催 (2018年7月6日(金) - 8月5日(日))
- ・ 水木を含めた数人のアーティストで運営する新しい共同スタジオ“VOSTOK”のオープンスタジオも開催 (2018年6月23日-24日)

谷中
佑輔

Yuske Taninaka

ベルリンに移って来て約2年が経った。初めて来たのはトーキョーワンダーサイト（現・トーキョーアーツアンドスペース）の二国間交流プログラムに参加してのことだった。初めての海外でのアーティスト・イン・レジデンス、期待は大きかったが、現実は厳しかった。ベルリンは今や世界のアートキャピタルの一つであり（経済的には違う）、世界中から野心的なアーティストが集まっている。スタジオは立派なものであったが、日本から3ヶ月だけ交換プログラムに参加している僕はお客様でしかない。いい経験を持って帰ってねという感じだ。腹が立った。日本から長期でどこかに出てみたいという気持ちもあったので、もう一度この街で挑戦しようと、自分がやって来たことと、この街でできることの接点を探した。そこで出会ったのがダンスである。

ベルリンにはダンサーが多い。僕は大学一回生の頃からパフォーマンスの作品を作っていたが、それをダンスとして考

えたことはなかった。ベルリンのダンサーには、それぞれがそれぞれの身体やアイデアを使って表現を模索している雰囲気がある。ここなら、彫刻にまつわるコンテキストでパフォーマンスをしている自分もできるのではないかと思い、Tanzfabrik BerlinのDance Intensive Programという一年間のコンテンポラリーダンスのプログラムを見つけ、直接掛け合っておオーディションをしてもらい、参加が認められた。2016年の夏に再びベルリンに戻り、一年間プログラムに打ち込んだ。そしてこの一年で自分の作家としてのスタンスはかなり変わった。僕はもともと、関西の彫刻のコンテキストを引き継ぎながら、日本においていかに彫刻は可能かということを試していた。が、ベルリンとは会う人、話す内容、住む空間、全てが違う。なにより社会の中でマイノリティになるという感覚を強く持ったことがなかった。日本においていかに彫刻は可能かということとは、ここではそれほど意味を持たない。

話は少し遡って、2015年の1月。僕は@KCUAのアーティストワークショップを受けていた。講師はL.A.をベースとするラッキードラゴンズだった。テーマは“Score”。アラン・カプロウ（Allan Kaprow）などを前提に据えたテーマだ。ここでスティーヴ・パクストン（Steve Paxton）の“Satisfyin Lover”などダンスの名作と言われるようなスコアも同等に扱っていたことが後々影響を与えたような気もする。実はその一年後に、彼らに教えてもらったL.A.でのプログラムThe Mountain School of Artsにも参加したのだが、そこでも多くの著名なアート関係者に会う中に、ダンサー／コレオグラファーのシモーヌ・フォルティ（Simone Forti）のワークショップを受けるという経験もした。ダンスと美術が“Art”という中でそれほど離れたものでないと感じるようになった要因の一つだ。

とは言うものの、やはりベルリンで自己

紹介をするときに「彫刻とダンスをやっています」と言うと、それなりに珍しがってもらって、作品の話がそこのできるメリットがある。ちょうどこのレポートを書いている頃、僕はドイツ人の同世代のアーティストとのコラボレーション作品をフランクフルトで発表している。ダンス関係から繋がった友人の家でのパーティーで出会った人がちょうどプロジェクトのためのメンバーを探しており、僕の活動を面白がってもらったことから繋がった。パフォーマンスの中で分解・再構成されるための彫刻を作り、またそのパフォーマンス自体にも参加するという形で関わっている。僕以外の4人のパフォーマンスのプロフェッションは役者なのだが、自分の作品とも遠からずというところである。というようにドイツローカルな活動も最近ようやく動き出したところ。色々移動しながらではあるが、もう少しベルリンに腰を据えていたいと思っている。



The Mountain School of Arts の2016年参加者と
Simone Forti. Photo by Sharon Sabahi

谷中 佑輔 Yusuke Taninaka

1988年大阪府生まれ。ベルリン在住。2014年京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。お互いに関係を持った彫刻とパフォーマンス、あるいはその関係性を背景としたそれぞれの独立した表現方法から成る作品を瞬間的なものではなく、行為遂行性を持続させることに取り組んでいる。主な個展に「In/Flesh/Out」(Kunstraum Kreuzberg / Bethanien, ベルリン, 2015)。グループ展に「クロニクル、クロニクル！」(クリエイティブセンター大阪, 2016-2017)、Joan Jonas Workshop Exhibition (Villalris of the Botin Foundation, スペイン, 2016) など。京都市芸術文化特別奨励者(2016)。公益財団法人ポーラ美術振興財団在外研修員(ドイツ, 2016-2017)。

NEWS

- ・ベルリンのポップアッププロジェクトスペース“+DEDE”にてグループ展“Scrolling, Scroll, Scr!”に参加予定(2018年7月11日-15日)
- ・その他活動情報はweb <http://yusuke-taninaka.com>にて更新しています



Courtesy of Erskine, Hall & Coe.
Photo by Andy Stag



石塚
源太

Genta Ishizuka

2017年2月、僕はロンドンに行った。目的はSaatchi Galleryで行われるCraft Councilが開催するCollectというアートフェアに大阪のアートコートギャラリーから出品するためだった。40程度の国内外のギャラリーが参加していた。このフェアからヴィクトリア&アルバート博物館（以下、V&A）がいくつか作品をコレクションするのだが、運良くこの年は僕の作品が選ばれた。あまりの決定の早さとコレクションへの意識の高さに驚いた。またV&Aの学芸員からその年の秋から約1年Lustrous Surfacesという各国のラッカーを扱った展示を企画しているのでそれに是非展示したいとの話もいただいた。

また、Erskine, Hall & Coeというギャラリーから個展のオファーがあった。このギャラリーはルーシー・リー（Lucie Rie）やハンス・コパー（Hans Coper）のコレクターであったアニータ・ベッソン（Anita Besson）が開いたGalerie

Bessonが前身で、彼女が他界したあと2011年から今のオーナーが名称を変えて引き継いでいる。時期は1年後、V&Aの展示も開催中の2018年2月になった。ギャラリーが位置するのはロンドンの中心で、高級ブランドや宝石の路面店が建ち並びエリアだ。美術においてもSotheby'sのオークションハウスや、美術館のような広さを持つGagosian Galleryや、Pace Gallery、Hauser & Wirthなどのメガギャラリーも同じエリアに存在する。経済活動と美術が同居しているそのようなエリアに自分の作品が展示されるということに現実味が湧かなかった。

作品をロンドンに送った後、はたして無名日本人作家の展覧会をどれだけの人が見に来てくれるのだろうかと不安にもなった。しかし、蓋を開けてみると僕が在廊していた初日には交換留学時のロンドンの友人や、美術関係者など、多くの人たちが来てくれて作品や展示に好印象

を持ってもらえた。驚いたことは人々の作品や作家に対する敬意である。そのことの嬉しさと責任を感じたし、そのおかげでこの先の展望も描けると考えた。

しかしそれは僕が特別だったわけではなく、作品を受け入れてくれる土壤があるということが大きいと感じた。うまく言えないが自分の作品と相性のいい人達が一定数いてくれるということだろうか。人々の興味の対象がそれぞれあって、そのことが大きくはメインの文化となっておりしっかりと根付いている気がした。

現地では自分が自分の作品をものすごく客観的に見ていたことが意外だった。これは物理的な距離の影響が大きかったと思う。作品は全て京都のアトリエで作ったが、それらが、時差-8時間、約9,500 km離れたロンドンに展示されているということは、作品と自分に精神的な距離を与えてくれた。アトリエで長い時間をともにした作品が、他人のような

顔をしてギャラリーに並んでいるのは不思議な感覚だった。作品が自分からうまく離れ、その分、次を頑張ろうという気持ちになれた。

数年前、あるキュレーターが、世界には知らない作家、作品がたくさんある。そして知っていくことが大切だと話していた。例えば僕が2015年に@KCUAでアーティストワークショップを受けたネリー・ソニエは羽で作品を作る作家だった。ワークショップを通じ彼女の技術や活動を知っていくことで自分の知らない世界への興味が出て来た。今回自分が「知らない作家」として海外で展示し、少しでも知ってもらえて活動に広がりを持てることは今後への指針にもなると思う。今回の経験を経てしたたかに制作活動を続けていきたいと思った。



Courtesy of ARTCOURT Gallery

石塚 源太 Genta Ishizuka

1982年京都府生まれ、同在住。2006年ロイヤルカレッジオブアート交換留学。2008年京都市立芸術大学大学院工芸専攻漆工修了。漆芸の伝統的な造形や装飾の技法を踏まえ、独自の視点から作品を展開。素材の表情に未知の可能性を探り、工芸という領域に対し新たな価値観を提示しようとしている。主な展覧会に、「オープンシアター2017」(KAAT 神奈川芸術劇場、横浜、2017)、「リフレクション」(岐阜県現代陶芸美術館岐阜、2016)など。アメリカのミネアポリス美術館やイギリスのヴィクトリア&アルバート博物館に作品が収蔵されている。

NEWS

- ・ ARTCOURT Gallery 開廊15周年記念展(2018年7月3日-8月10日)
- ・ ヴィクトリア&アルバート博物館で「Lustrous Surfaces」が開催中(2017年10月14日-2018年9月16日)

WORKSHOP @KCUA

アーティストワークショップ 後日譚



オル
太

OLTA

オル太は2015年に@KCUAで実施されたアルトゥル・ジミエフスキとパヴェウ・アルトハメルワークショップ「HOUSE OF DAY, HOUSE OF NIGHT」に参加した。約10日間に及ぶワークショップが昼夜を問わずに連日行われたが、ワークショップのステートメントには、日本伝統芸術とヨーロッパ現代芸術の間の多声的対話から意見の連鎖が生まれ、ワークショップがゲームのように同じところをグルグル回りながら、手段を選ばないことが記されている。この展覧会で、《Untitled》と《パンの磔》という二つの作品を展示期間にその場にいる参加者と共同で制作した。《Untitled》は、会期中@KCUAでの滞在制作にて紙を折り大仏を制作し、それを京都の寺のお焚き上げで焼いた。《パンの磔》は、竹でつくった案山子に小麦粉を捏ねてはりつけ、鴨川の河原で焼いてパンをつくる。キリストの肉（パン）や十字架（案山子）を連想する生贄をつくり、滝に持ちこみ奉納した。この時に

空也の滝を訪れたことがきっかけとなり、六斎念仏踊りから着想を得たパフォーマンス作品《Walking Cascade》を釜山ビエンナーレに出品した。作品では、滝をビデオフィルムが循環する構造体で見立て、六斎念仏踊りで用いる太鼓や鉦をビデオカメラやベル、リールなどで制作し代用する。言葉を分節化して唄をつくり、身振り（歩く、撮る、転がす、叩く、等）を組み合わせた。作品について、韓国の友人でありキュレーティング・ユニットであるOPEN CIRCUITと話す機会があり、日常で用いる行為や道具を見出すマニュアルブックを制作するアイデアを思いつく。彼らは2014年から2017年までソウルの複合施設、世運商街にてインディペンデントスペースを運営していて、2014年にソウル市立美術館のアーティスト・イン・レジデンス Nanji Residency への滞りがきっかけで知り合った。この時は、同じく韓国の演劇集団、未完成プロジェクトとの共同作品「Camp: Space Became Lion」を制

作し、ソウル・マージナル・シアター・フェスティバルに出品した。中国の朝鮮族の人々が多く住む街、加里峰洞を舞台に路上とビルの一室でパフォーマンスをしたが、演劇集団の一人がOPEN CIRCUITのメンバーでもあるチョ・グナ氏であった。特定のルーツからではなく、その時、その場で作られる伝達のあり方を模索して、2017年よりOPEN CIRCUITとの共同プロジェクト「TRANSMISSION PANG PANG」を制作している。プロジェクトでは、日本と韓国の芸能や民謡を中心にリサーチし、インド古来のボードゲーム「蛇と梯子」をモデルにした独自のボードを用いて、観客参加型のゲーム形式によりパフォーマンスを行う。参加者が今に伝わる身振りを即興でなぞり、道具や唄を組み合わせ、独自の伝承を作っていく。2017年に韓国の江陵端午祭に行き、その後に日本でいくつかの芸能や祭りをリサーチし、ソウルのELEPHANT SPACEで一回目の公演を行った。韓国で映像制作やアー

カイブ事業を手がける会社LEVEL9が運営するスペースだ。オル太と同世代のメンバーにより運営され、ギャラリーは一面映像投影が可能のようにプロジェクターが多数設置されている。1回目のソウル公演は、リサーチの映像やボードゲームの進行、繰り上げられるパフォーマンスを投影した。そして、今年2回目の公演を沖縄のインディペンデントスペース、BARRAKで開催した。屋上で公演を行い、最終日にはビーチに場所を移した。ソウルでは映像体験をもとにパフォーマンスを行い、沖縄では芸能が営まれてきた自然を舞台に公演した。移動することで公演場所の特性が顕になり作品が孕む意味が変化する。私たちが直面する様々な問いは、グローバル化した世界においてそれぞれの場が多角的に入り組み、往来することで見出される。



オル太 OLTA

2009年に結成。1980年代生まれの6名の美術家（井上徹、川村和秀、斉藤隆文、長谷川義朗、メグ忍者、Jang-Chi）からなる表現集団。祭りの記憶、田舎の風景、サブカルチャーなど等身大の集团的、風土的感性を基点にインスタレーションや自らの身体を投じたパフォーマンスを通じて、文化を支える集会的な記憶や人間の根源的な欲求に迫る作品を展開する。2011年に第14回岡本太郎現代芸術賞展で岡本太郎賞受賞。

NEWS

- ・ 斉藤隆文（オル太）個展「おぼろげな凱旋スー
屁理屈めいた肉-」会場「コ本やhonkbooks
（2018年5月22日-6月17日）」
- ・ トークイベント、ワークショップ、ドローイング大会など多数開催予定。
詳しくはTwitter参照：@olta_jp

SCHEDULE @KCUA [2018.04-2019.03]

4月 APR.

5月 MAY

6月 JUN.

7月 JUL.

8月 AUG.

9月 SEP.

4/7 (土) - 5/20 (日)

京芸 transmit program 2018

京都市立芸術大学卒業・大学院修了3年以内の若手作家の中から、いま、@KCUA が一番注目するアーティストを紹介するプロジェクト。

第2弾となる本年度は、熊野陽平（構想設計）、小林紗世子（日本画）、藤田紗衣（版画）、吉田桃子（油画）の4名を選出。



京芸 transmit program 2018 展示風景（写真：来田猛）

最新情報は @KCUA ウェブサイトにて
ご確認ください

6/2 (土) - 7/8 (日)

im/pulse: 脈動する映像

「感覚民族誌」的観点からみて優れたアプローチをとる実践や、身体深部の感覚や感性の作用を問う表現に着目。ヴィンセント・ムーン、contact Gonzo、Anthro-film Laboratory が出展。



西山翠峰「虎」（模写・部分）
（写真：田村友一郎）

7/7 (土) - 7/8 (日)

京芸 transmit program 2018:

ART OSAKA version

会場：ホテルグランヴィア大阪

7/21 (土) - 8/19 (日)

明治150年記念・京都のキセキ・プロジェクト
京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展

田村友一郎「叫び声／Hell Scream」

本学が創立以降迎ってきた道筋を手掛かりとしながら、美術家の田村友一郎と共に調査・研究を行い、一つの展覧会を作り上げていく。京都市立芸術大学の前身である京都府画学校の創立者の一人、田能村直入に注目した新作インスタレーションを発表。

8/25 (土) - 9/2 (日)

つながる糸 ひろがる布

一三大学染織専攻学生選抜展一

8/25 (土) - 9/2 (日)

人工的品

出展作家：大谷史乃、長町那美、前田菜月



9/15 (土) - 10/28 (日)

クリスチャン・ヤンコ

(タイトル未定)

既成の社会構造やアートシーン作風で知られるクリスチャンゲン、ドイツ生まれ)を招き、など、アートの世界とそれとやそれぞれのあり方を問う。芸術の外の世界に橋渡しをする。

10月 OCT.

11月 NOV.

12月 DEC.

1月 JAN.

2月 FEB.

3月 MAR.

11/10 (土) - 11/25 (日)

秋山陽 (本学美術学部陶磁器専攻教授)

退任記念展

11/29 (木) - 12/9 (日)

京都市立芸術大学

第29回 留学生展



クリスチャン・ヤンコフスキー
「Walking Logic」展示風景
Photo by Adam Sakovy

8 (日)

ヤンコフスキー 個展

トーションを批判する挑発的でアイロニカルな
クリスチャン・ヤンコフスキー (1968 年ゲッティ
財団) を招聘。スポーツ、宗教、マス・メディア
とそれとは異なる世界とを接続し、その関係性
を問いかけるような作品を通じて、現代芸術と
現代生活をする彼の活動を個展形式で紹介する。

12/1 (土) - 12/9 (日) (仮)

いわゆるかまがさき 一所謂釜ヶ崎一

出展作家: オギハラフウカ、島村鼓

12/15 (土) - 12/24 (月・休) (仮)

Partition——パーティション

出展作家: ガブリエ・バロンタン、松延総司、
山角洋平、バンジャマン・ラフォールと
セバスチャン・マルティネス＝バラほか

12/15 (土) - 12/24 (月・休) (仮)

松井沙都子「ミニマル・ハウス」

2018/1/12 (土) - 2/11 (月・祝)

拡張された場におけるアートマネジメント人材育成事業

状況のアーキテクチャー 2018

物質・生命・社会の3つのテーマが星座のよう
に多角的に結びつく新しい展示と多感覚的な鑑
賞と参加の方法を建築家と共に共同作業で作
りあげる。これらの制作プロセス自体が、開か
れたアートの可能性を問直す「状況のアーキ
テクチャー」となることを目指す。



(参考) 2017 年度事業の様子

3/9 (土) - 3/24 (日)

出原司 (本学美術学部

版画専攻教授)

退任記念展

2/16 (土) - 3/3 (日)

京都市立芸術大学美術学部

同窓会展 (タイトル未定)

2/16 (土) - 3/3 (日)

前田耕平

「バンガシアノドン ギガス」(仮題)

見えない人にとって この冊子は白紙です。

田中みゆき

黒い画面に白文字でタイトル「ナイトクルージング」駅の構内。JRの改札機にタッチして入ってくるサングラスの男性。

がっしりした体型の長身。白杖をつき、長い髪を後ろで束ね、ギターケースを背負う。

システムエンジニアでありミュージシャンの加藤秀幸。

吊り革に掴まる。

生まれつき目が見えない加藤秀幸さんが映画をつくるプロセスを追ったドキュメンタリー映画『ナイトクルージング』が、先日完成しました。これは、わたしが書いた映画の冒頭の「音声ガイド」です。

そもそも映画をつくる前に、見えない人は一体どうやっ

て映画を「観る」のか。そう思う人はまだまだ多いかもしれません。しかし実際には、点字図書館などでは映画のサウンドに音声ガイドをつけて編集された「シネマ・デイジー」というCDが貸し出されていますし、最近では「UDCast」というスマートフォンでも使えるアプリが開発され、視覚に障害のある多くの人が映画鑑賞を楽しんでいます。映画館でそのアプリを立ち上げると、映画の音と同期して、音声ガイドが流れる仕組みです。

音声ガイドとは、本編の音声だけでは把握しきれない映画の視覚的情報を言葉で伝えるものです。そこにはいくつか基本的な決まりごとがあります。①映画の音や台詞には被せない、②耳からイメージできる情報は解説ししない、③同時性を持つ（映像を見ている人と同じように楽しめるようにする）、④人物の表情などから読み取れる心情に解説者の主観を入れない（〇うつむく少女 × 悲しそうな少女）など、単に音声情報の補助としてではなく、より画を想像させる役割として、音声ガイドは位置づけられています。

言葉で聞くと簡単に聞こえるかもしれませんが、例えば何でも目に入った映像の視覚情報をその尺の中で解説しようとする、いかにそれが難しいことかわかります。例えば冒頭の音声ガイドは、約15秒ほどの映像です。し

かし、駅の広さや賑わい、通り過ぎる人たちの年齢や性別、加藤さんの服装など、すべての視覚情報を音声に置き換えようとする、到底15秒には収まりません。そこで、主人公である加藤さんの風貌と視覚障害者であることを想起させる要素、そしてこの後の流れに重要な「サングラス」「白状」「ギターケース」を抜き出し、加藤さんの行動と共に紹介しました。最後に車内の映像に切り替わるのは、電車の音と車内アナウンスが聞こえるので省いています。こうして視覚情報に着目すると、視覚を通してわたしたちは尋常ではないほど多くの情報を同時に受け取り、必要ない情報を次から次へと絶え間なく消去することで何事もなかったかのように生きられていることに気づきます。

また、音声ガイドでは、ストーリーの流れや展開を優先するため、カット割りや構図の説明は省かれることが多々あります。ある時、興味深いことが起こりました。見えない人と音声ガイドである場面を観ていた時のことです。それは、車の運転席と助手席に座って会話する親子を車の外で横から撮影した映像でした。その場面を観終えると、その見えない人は「わたしは車の中に一緒に乗って観ていました」と言いました。見えているわたしは、

どうやったってそんな気持ちで観ることはできません。また、ストーリーの中の二人と一緒に車にいる自分の姿を想像すると、その不自然さに居心地悪ささえ感じます。見えているということがいかに不自由か、そして音で観るとそんな見方があるものか、と面食らいました。

つつい“イメージ”と言うと、見える人たちは視覚的なものと結びつけがちです。しかし、見えない人たちと接していると、視覚以外の方法でもイメージが生まれることに気づかされます。そしてそのイメージは、わたしたちが想像するよりずっと自由で多様なものである可能性があるのです。通常あるべきものがないと思われている障害のある人が、同じ映画を観てそのようにイメージを膨らませていることを想うと、まだまだ世界は面白いとわたしは密かににやりとしてしまうのです。

田中みゆき Miyuki Tanaka

キュレーター／プロデューサー

アートセンターにて展覧会や公演などの企画に携わったのち、フリーランス。障害を「世界を新しく捉え直す視点」として活動を展開。主な仕事に『義足のファッションショー』（日本科学未来館、2014）、『障害×パフォーミングアーツ特集 “dialogue without vision”』（国際交流基金、2016）、『大いなる日常』展（ボーダレス・アートミュージアム NO-MA、2017）、『音で観るダンスのワークインプログレス』（KAAT 神奈川芸術劇場、2017-）など。映画『ナイトクルージング』（2019年公開予定）にプロデューサーとして携わる。



麗水

田村友一郎

日本海にひらけた山陰にひっそりと佇む城崎温泉。その脇を流れる円山川沿いを車で20分も遡ればそれなりの賑わいをみせる豊岡に着く。その川沿いは、並行して走る山陰本線の線路があるぐらいでこれといって見るものもない。人家もまばらで、時折地元の名産のカニを売る店がそのカニを模した巨大な看板とともに現れるくらいだ。ある朝、車を走らせていると城崎温泉と豊岡のちょうど真ん中あたり、「麗水」と書かれた寂れた看板が目に入った。何日も車で通っていたが気づか

なかった。どうやら喫茶店らしい。車を駐車場にいれ店の中の様子を伺うが、客がいる様子はない。ただ、扉の横には営業中と書かれた白い札が立てかけられている。ゆっくりと扉のノブを引く。「カラン」と乾いたベルの音。店内から声はしない。中へ足を踏みいれると、店の隅、入り口からは死角になっているボックス席に店主らしき初老の男性が座っていた。窓から差し込む逆光に店主の顔はよく伺えない。「コーヒーひとつ、ホットで」何やら書き込んでいたスポーツ新聞をそばに置き、店主はカウンターの奥へと消えた。テーブルには眼鏡とリモコン、LARKのボックスとライター、あとはよく先が削られたBの鉛筆。かたわらのスポーツ新聞にはやりかけのクロスワードパズル。ほどなくして出てきたコーヒーには厚切りのトーストが添えられていた。丁寧に淹れられたコーヒーは満足のいくもので店の構えとは裏腹な印象を残した。帰り際、店の名前「麗水」のいわれについてなんとなく店主に尋ねた。「この近くの山肌から綺麗な水が湧いって、そこから麗しい水、麗水とつけたんですわ。ここのコーヒーもその水を使ってるんです」なるほど、コーヒーの味に合点がいった。「そういやあ、お客さんによく似た人がこの前うちに来んさってな、おんなじようにコーヒーの水のことを聞きなつたわ。城崎泊まりもって、なんか豊岡で茶会をしんさるんで、そこで使う水を探しとるって」自分に似た人物が同じようなことをここで。ひどく困惑した。「でな、その人がそのあとまたうちに来なつてな、茶会のしつ

らえにここのテーブルセットを貸して欲しいって言いなつて、けつたいなこと言うなあと思つたけど貸したんですわ。だで、そこそっくりのうなつて」店主が指差す先には、たしかにそっくりなくなったボックス席の痕跡が見てとれた。そう言うなり元のボックス席に座りなおした店主は、スポーツ新聞を広げ黙々とクロスワードパズルを始めたのだった。

記録によれば、田能村直入が61歳の春（明治8年）に豊岡にて茶会を催したとされている。「六十一歳春復た温泉ニ浴シ湯島八勝ヲ選ヒ豊岡ニ於テ茶會ヲ設ケ夏六月に京ニ歸リ」（直入先生系傳）

田村友一郎 Yuichiro Tamura

1977年富山県生まれ。熱海市在住。日本大学芸術学部写真学科卒業。東京藝術大学大学院映像研究科博士後期課程修了。既にあるイメージや自らが撮影した素材をサンプリングの手法を用いて使用し、独自の関係性を導き出し再構築することで時空を超えた新たな風景や物語を立ち上げる。近年の主な展覧会にSignature Art Prize 2018（シンガポール国立博物館）、日産アートアワード2017（BankART）、ヨコハマトリエンナーレ2017 ヨコハマサイト（永川丸）、「試論：栄光と終末、もしくはその週末/Week End」（小山市立車屋美術館、2017年）、「2 or 3 Tigers」（Haus der Kulturen der Welt、ベルリン、2017年）など国内外多数。
www.damianoyurkiewich.com

明治150年・京都のキセキ・プロジェクト
京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展
田村友一郎「叫び声／Hell Scream」
会期：2018年7月21日（土）～8月19日（日）
※展覧会情報はpp. 2, 26もご覧ください。

京都市立芸術大学
Kyoto City University of Arts

@KCUA



京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

〒604-0082 京都市中京区押小路町338-1

地下鉄「二条城前」駅（2番出口）南東へ徒歩約3分

「堀川御池」バス停下車すぐ

TEL 075-253-1509

<http://gallery.kcuu.ac.jp>

編集：西谷枝里子（リレーリレー）、藤田理穂、永田絵里、西尾咲子

デザイン：佐村健太郎

発行：2018年6月15日

© 2018 京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

